

日本語教科書で扱われる「日本文化」の認識に 関する心理学的研究

— 日本語母語話者と日本語学習者の比較 —

住 田 環
(2006年9月29日受理)

A psychological study of recognition to “Japanese Culture”:
A comparison between native speakers of Japanese and Japanese language learners

Tamaki Sumida

“Culture Studies” in Japanese as a second language is still made by trial and error. The data seems to reflect that most classes are prepared and taught according to the instructor’s own discretion. I surveyed the recognition to “Japanese Culture” by questionnaire to search for some clues for modeling “Culture Studies”. A survey was carried out and compiled using 24 questions based on the analysis of six Japanese textbooks. The examinees are native speakers of Japanese and Japanese language learners. The data was analyzed using factor analysis.

The findings of the survey were that the factor-structure of recognition to “Japanese Culture” is different between native speakers of Japanese and Japanese language learners, whereas they also have a common view of the culture.

Key words: Japanese culture, native speakers of Japanese, Japanese language learners, recognition, factor analysis

キーワード：日本文化，日本語母語話者，日本語学習者，認識，因子分析

1. 問題と目的

日本国内の日本語教育現場において、「日本文化」は授業の中でどのように扱われているのであろうか。細川(2002)や授業の実践報告を見る限り、実証的データに基づいたシラバス作りが行われている授業報告はほとんど見当たらない。「日本文化」をどう考え、授業の中でどう扱うのか、という問題については未だ現場の教師が試行錯誤しながら、日本語も含めた文化学

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：水町伊佐男(主任指導教員)、迫田久美子、
宮谷真人、松見法男

習に挑んでいるのが現状であろう。

本研究では、この「文化」問題に対して、心理学的なアプローチを試み、因子分析法を用いた実証データに基づいて、日本語母語話者と日本語学習者の「日本文化」に対する認識構造を探り、その共通点、相違点から、日本語学習の中での日本文化の取り入れ方を検討する。本稿では、日本語母語話者と日本語学習者に対して行った、1回目の質問紙調査の結果を報告する。同じ質問項目に対する日本語母語話者と日本語学習者の回答を分析し、それぞれの、「日本文化」に対する認識に影響を与えることが想定される潜在因子を抽出し、その因子構造の比較を試みる。

2. 質問紙の作成

2.1. 「日本文化」の捉え方

「日本文化」に対する認識を探るための質問紙を作成するにあたっては、「日本文化」の枠組みをどう捉えるか、ということが大きな課題となる。本研究では、教育現場で使用されている日本語教科書内で、どのような日本文化の側面が取り上げられているかを分析することを出発点とし、それを基に、質問項目を策定した。

2.2. 日本語教科書の選定

分析の対象とする日本語教科書は、日本国内の日本語教育機関で使用されている教科書のうち、使用頻度が高いものを基準に選んだ。

教科書の使用頻度については、『日本語学校全調査』（エイ・アイ・ケイ教育情報部、2005）のデータに基づいた。調査協力校431校中、379校（88%）は日本語学校からのデータであった。日本語学校の場合、学習者の大半がゼロ初級で来日し、教科書を基本にした日本語学習を積み上げながら、限られた時間内で中～上級レベルまで達するのが一般的である。授業内での文化の扱い方は教育機関によって異なることが推測されるが、学習者が教科書を通して、どのような文化側面に触れながら日本語を習得していくのか、は大きな手がかりになると考えられる。

初級、中級、上級の各レベルにおける使用頻度が高かった教科書は Table 1 の通りである。

Table 1 分析対象とした日本語教科書

レベル	教科書名（出版社）	使用頻度
初級	「みんなの日本語」初級Ⅰ、Ⅱ（スリーエーネットワーク）	66.6%
中級	「テーマ別中級から学ぶ日本語」（KENKYUSHA）	42.5%
	「ニューアプローチ中級日本語基礎編」（日本語研究社教材開発室）	13.7%
	「文化中級日本語」Ⅰ、Ⅱ（文化外国語専門学校）	11.8%
上級	「テーマ別上級で学ぶ日本語」（KENKYUSHA）	43.6%
	「ニューアプローチ中上級日本語完成編」（日本語研究社教材開発室）	9.3%

2.3. 教科書分析

2.2. で挙げた日本語教科書の中で扱われている文化語（ここで言う「文化語」とは、今田・中村（1975）に倣い、「お見合い」「学歴社会」など、日本語と学習者の母語との対応だけでは十分に理解できない語、また、学習者に対して考え方や文化的背景の説明が必要であろうと思われる語を指す）を抽出し、KJ法により、以下の8カテゴリーに分類した。

- ①衣食住（主に食）②季節（行事とも関連）
③宗教 ④伝統文化 ⑤技術&芸術
⑥社会生活 ⑦高齢化社会 ⑧環境問題

2.4. 質問項目の策定

2.3. に挙げた8カテゴリー毎に、それぞれ質問項目を作成した。策定に際しては、NHK放送文化研究所（2000）が行っている日本人の意識調査、ならびに統計数理研究所国民調査委員会（1992）が行っている生活と文化に関する意識調査などを参考にし、これらの調査で実際に使用されている質問項目を、ほぼそのままの内容で使用したものと、本研究で新たに考えられた質問項目の中から、予備調査を経て24個の質問項目に絞った（Table 2を参照のこと）。各質問項目に対しては、すべて4段階評定で回答を求めた。

Table 2 質問項目

- 問1 普段の食生活の中で、和食の割合が多いですか
問2 食事の際、使われている食器へも関心が向きますか
問3 食事の際、「旬の食材」を意識しますか
問4 食に関するテレビ番組や雑誌などに興味がありますか
問5 自分の部屋を作るとしたら、洋室より和室を優先しますか
問6 着る機会があれば着物を着ますか
問7 外からの虫の鳴き声に「季節感」を感じますか
問8 意識してお守りや縁起ものを自分の身の回りに置いていますか
問9 占いに興味がありますか
問10 「マンガ」を読みますか
問11 親になったら、自分の子どもに対して、できるだけ「高学歴」と言われるような学歴を与えてやるように努力しますか
問12 ○○道（茶道、華道、柔道、剣道など）と呼ばれるものに興味がありますか
問13 「時代物」は好きですか
問14 相撲は好きですか
問15 将来、自分の持ち家として、一軒家を持ちたいですか
問16 就職した時、職場の上下関係には気を遣いますか
問17 自分にとって、環境保護は重要な問題ですか
問18 自分が正しいと思えば世間の慣習に反しても、それを押し通しますか
問19 できるだけ長生きをしたいと思いませんか
問20 老人を人生の先輩として敬うべきだと思いますか
問21 自分は「宗教心」を持っていると思いませんか（特定の宗教を信仰してなくても構いません）
問22 会社に次のような2人の課長がいた場合、どちらの課長の部下になるのがいいですか
①規則を曲げてまで無理な仕事をさせることはないが、仕事以外のことで人の面倒をみない
②時には規則を曲げて無理な仕事をさせることもあるが、仕事以外でも人の面倒をよくみる
問23 次の①、②のいずれかの人と組んで仕事をする（その仕事は難しく、しかも長期にわたる）場合、どちらの人を選びますか
①多少付き合いくいが、能力のすぐれた人
②多少能力は劣るが、人柄のよい人
問24 物事を決定する時、①と②ではどちらがあなたの好きな人柄ですか
①「一定の原則に従うこと」に重点をおく人
②「他人との調和をはかること」に重点をおく人

3. 質問紙調査

3.1. 調査の目的

日本語母語話者（以下、母語話者とする）と日本語学習者（以下、学習者とする）の、「日本文化」に対する認識構造を比較し、その共通点、相違点を明らかにすることである。

3.2. 被調査者

<調査1：母語話者>

広島県内の国立大学1校と私立大学2校にそれぞれ在籍する大学生、大学院生209名が調査に参加した。有効回答者は176名で、年齢構成は106名（60.2%）が10代後半、62名（35.2%）が20代、8名（4.5%）がそれ以上であった。性別は男性が74名、女性が102名であった。

<調査2：学習者>

広島県内の国立大学1校に在籍する大学院生、および私立大学2校に在籍する学部生56名（男性13名、女性43名）が調査に参加した。全員が有効回答者であった。国籍別では中国が33名（58.9%）、台湾が11名（19.6%）、韓国が6名（10.7%）、その他が6名（10.7%）であった。年齢構成は42名（75%）が20代、14名（25%）が30代で、滞日平均年数は3年であった。56名中42名（75%）が日本語能力検定試験1級合格者であった。

3.3. 調査時期・手続き

調査1は、2006年1月から5月にかけて実施した。調査用紙は88%が大学の授業時間内に配布・回収し、残りの12%は授業時間外に個別に配布・回収した。

調査2は、2006年6月に行い、調査用紙はすべての被調査者に個別に配布し、一定期間経過後に個別に回収した。調査用紙は日本語で作成したものを配布した。

3.4. 分析方法

質問紙の回答（質問24項目に対する回答）を以下の①～④の順で分析した。

①調査1と調査2を合わせた回答を因子分析にかけ、留学生も含めた大学生、大学院生の「日本文化」に対する潜在因子を抽出した。

②①の因子分析から抽出された因子毎の標準因子得点、ならびに質問24項目それぞれへの素点について、母語話者と学習者の間に差があるかどうかを確かめるため、項目ごとにt検定を行った。

③①の分析は母語話者、学習者の回答を合わせた総合結果になっている。そこで、それらを別々に分析した結果と比較するため、調査1（母語話者）の回答

について因子分析を行い、潜在因子を抽出した。

④調査2（学習者）の回答について因子分析を行い、潜在因子を抽出した。

尚、因子分析に際しては、質問項目1から21の各回答については、「非常にそうである（非常にそう思う）」を4点、「まったくそうではない（まったくそう思わない）」を1点とし（但し、項目18に限り逆転項目）、質問項目22から24の各回答については、「②を選ぶ」を4点、「①を選ぶ」を1点として、1点、2点、3点、4点、の4段階で得点化を行った。

4. 結果

因子分析は、すべて統計パッケージSPSSを用いて行った。

4.1. 調査1と調査2の因子分析（分析①とする）

24項目の質問項目を用いて因子分析（重み付けのない最小二乗法、スクリープロットならびに因子の解釈の可能性も考慮しながら因子数を決定、プロマックス回転）を行った。0.16を基準に共通性の値が低かった3項目（質問項目1, 5, 23）と0.35を基準に因子負荷量の低かった5項目（質問項目4, 6, 14, 22, 24）、複数の因子に0.35以上の負荷量のあった1項目（質問項目20）、および、1項目1因子として独立した項目10の「マンガ」（因子負荷量0.641）を除いた14項目について再度因子分析を行った。その結果、3因子が抽出された。因子パターンをTable 3に、因子間相関をTable 4に示す。

Table 3 分析①の因子パターン

	1	2	3
18. 世間への抵抗	-0.555	0.200	0.074
12. ○○道	0.530	0.220	-0.169
3. 旬の食材	0.498	0.042	-0.018
7. 虫の声	0.486	-0.013	0.105
2. 食器への関心	0.477	0.080	0.126
17. 環境保護	0.418	-0.054	0.322
13. 時代物	0.410	0.079	-0.095
8. お守り	-0.040	0.609	0.146
9. 占い	-0.058	0.471	0.158
21. 宗教心	0.043	0.400	-0.303
11. 高学歴	0.091	0.330	-0.010
15. 一軒家	0.177	-0.050	0.490
19. 長生き	-0.174	0.053	0.480
16. 上下関係	-0.026	0.203	0.434

Table 4 分析①の因子間相関

	1	2	3
1	1.000		
2	0.406	1.000	
3	0.121	0.092	1.000

Table 3において、因子負荷量の高い項目の内容を参考に各因子を解釈し、以下のように命名した。

<因子1：物事の調和志向>

第1因子に対してプラスの負荷量を示した項目を見ると、項目12（○○道）は体と心、項目3（旬の食材）は季節と食、項目7（虫の声）は季節と虫の鳴き声、項目2（食器への関心）は食事と食器、項目17（環境保護）は人間と自然、項目13（時代物）は身分と生活、というように、それぞれ物事の調和志向に関連する項目であると考えられる。これと対照的に、因子1にマイナスの負荷量を示した項目18（世間への抵抗）は、自分を押し通し、世間の慣習に抵抗するという点で、調和を乱す方向の内容であるといえる。これらのことから、因子1を、物事の調和を志向する因子であると解釈し、「物事の調和志向」と命名した。

<因子2：心の抛り所志向>

第2因子にプラスの負荷量を示した項目8（意識してお守りや縁起物を自分の身の回りに置いているか）、項目9（占いに興味があるか）、項目21（自分は宗教心を持っていると思うか）の3項目は、いずれも自分の心の在り方や方向性を求める心の動きに関わっていると考えられる。そこで「心の抛り所志向」と命名した。

<因子3：年功優位>

第3因子は、年を重ねていい結果を得る、と考える傾向だと解釈できる。項目15（将来、自分の持ち家として一軒家を持ちたいか）は、この先、年を重ねていつか、自分の力で自分の家を持ちたい、という志向であり、項目19は長生きをすれば何かいいことがある、と考えている心の傾向であり、項目16の職場の上下関係に気を遣うのは、年上あるいは目上の人に対して失礼のない接し方をすることで、自分が何か得る物がある、あるいは、自分が上の立場に立った時には、下の者より優位な存在である、という考え方の傾向であると解釈し、3項目に共通する因子として「年功優位」と命名した。

4.2. t検定（分析②とする）

母語話者と学習者の間での相違を確かめるため、以下の2点についてt検定を行った。

<分析①により抽出された3因子について>

分析①で解釈された各因子を構成する質問項目の標準因子得点を算出し、因子毎に両群間で因子得点の平均を比較した結果、因子1、因子2については、学習者の平均が、母語話者の平均より有意に高いことがわかった。（Table 5を参照のこと）

<24の質問項目について>

質問紙に使った24の質問項目毎に両者間で得点の平均を比較した結果、有意差があった項目はTable 6の通りである。

Table 5 因子1, 2の因子得点のt検定

		平均値	標準偏差	
因子1	母語話者	-0.63	0.91	*
	学習者	0.20	0.57	
因子2	母語話者	-0.09	0.80	***
	学習者	0.28	0.69	

*p<.05, **p<.01, ***p<.005, ****p<.001

Table 6 t検定により有意差のあった項目

●母語話者>学習者		平均値	標準偏差	
1. 和食の割合	母語話者	2.58	0.75	****
	学習者	2.20	0.59	
10. マンガ	母語話者	2.88	0.93	****
	学習者	2.16	1.00	
22. 課長	母語話者	3.02	0.90	***
	学習者	2.61	0.95	
24. 物事の決定	母語話者	3.19	0.82	****
	学習者	2.61	0.98	

●母語話者<学習者		平均値	標準偏差	
6. 着物	母語話者	2.56	0.97	*
	学習者	2.89	0.82	
11. 高学歴	母語話者	2.19	0.79	****
	学習者	2.98	0.84	
14. 相撲	母語話者	1.60	0.72	****
	学習者	2.05	0.84	
17. 環境保護	母語話者	3.05	0.69	***
	学習者	3.36	0.65	
20. 敬老心	母語話者	2.96	0.62	***
	学習者	3.29	0.68	
21. 宗教心	母語話者	1.72	0.80	****
	学習者	2.43	0.93	

*p<.05, **p<.01, ***p<.005, ****p<.001

●有意傾向		平均値	標準偏差
8. お守り (母語話者<学習者)	母語話者	2.30	0.93
	学習者	2.56	0.89
9. 占い (母語話者>学習者)	母語話者	2.75	0.86
	学習者	2.52	0.93

4.3. 調査1の因子分析(分析③とする)

24項目の質問項目のうち、天井効果の出た項目15、床効果の出た項目14と21を除いた21項目を用いて因子分析(重み付けのない最小二乗法、スクリープロットならびに因子の解釈の可能性も考慮しながら因子数を決定、プロマックス回転)を行った。(調査1における因子分析は探索的因子分析のため、当初、全項目を含めて分析したが、共通性が1を越える項目があるという警告が出たので、天井効果、床効果の出た3項目を削除して再分析を行った。)0.16を基準に共通性の値が低かった4項目(質問項目1, 5, 16, 24)と0.35を基準に因子負荷量の低かった3項目(質問項目2, 13, 20)、および、1項目1因子として独立した項目10の「マンガ」(因子負荷量0.716)を除いた13項目について再度因子分析を行った結果、3因子が抽出された。因子パターンをTable 7に、因子間相関をTable 8に示す。

Table 7 分析③の因子パターン

	1	2	3
17. 環境保護	0.657	0.089	-0.314
7. 虫の声	0.551	0.075	0.077
3. 旬の食材	0.509	0.046	0.205
18. 世間への抵抗	-0.458	0.234	-0.154
9. 占い	-0.088	0.706	0.101
8. お守り	0.165	0.541	-0.130
22. 課長	-0.185	0.443	-0.059
4. 食への関心	0.155	0.407	0.115
12. ○○道	0.104	0.225	0.617
6. 着物	-0.057	0.085	0.545
19. 長生き	0.210	0.129	-0.450
23. 同僚選び	-0.178	0.243	-0.373
11. 高学歴	-0.014	-0.024	0.315

Table 8 分析③の因子間相関

	1	2	3
1	1.000		
2	0.374	1.000	
3	0.455	0.193	1.000

Table 7において、因子負荷量の高い項目の内容を参考に各因子を解釈し、以下のように命名した。

<因子1：物事の調和志向>

第1因子に対してプラスの負荷量を示した項目を見

ると、分析①における第1因子の中から4項目取り出されたような形で、項目17(環境保護)、項目7(虫の声)、項目3(旬の食材)、項目18(世間への抵抗)となっている。分析①での解釈と同様、物事の調和を志向する因子と考えられるので、「物事の調和志向」と命名した。

<因子2：抛り所志向>

第2因子にプラスの負荷量を示したのは、項目9, 8, 22, 4であった。項目9の占いに興味があるのは、自分の行動や指針を決定する際の、占いに頼る傾向であると解釈できる。項目8は自分に好事をもたらすよう、お守りや縁起物に頼る傾向であると解釈できる。項目22に対する回答として、②の課長(時には規則を曲げて無理な仕事をさせる事もあるが、仕事以外でも人の面倒をよくみる課長)を選ぶ傾向は、仕事以外でも課長に面倒をみてもらいたいという依頼心の傾向であると考えられる。さらに項目4(食に関するテレビ番組や雑誌などに興味があるか)は、食に関しての有用な情報源としてテレビや雑誌に頼る傾向であると解釈される。これら4項目をまとめて、生活の中での抛り所を求める傾向であると解釈できるので、「抛り所志向」と命名した。

<因子3：心身の緊張感>

第3因子にプラスの負荷量を示したのは、項目12(○○道への興味)と、項目6(着る機会があれば着物を着るか)であった。まず、項目12にある、いわゆる○○道(茶道、華道、柔道、剣道など)には、ある型があり、それを通して○○道の精神を学び、さらにその精神を体現する、という道であり、心身を鍛えるという意味での緊張感があるものと考えられる。また項目6の着物は、着物を着ることで「日本人」を意識し、背筋が伸びる緊張感があると捉えられる。

これらとは逆に、この第3因子にマイナスの負荷量を示したのは、項目19(できるだけ長生きをしたいか)と、項目23(同僚選び)である。項目19は、老後に、束縛感なく、のんびりと余生を過ごすイメージを重ねている傾向だと考えられる。また、同僚を選ぶ際に、能力の有無よりも人柄の良さを優先するのは、長く一緒に仕事を進めていく同僚として、付き合い易さ、気楽さを求める傾向であると解釈できる。つまり、項目19, 22に共通するのは、項目12, 6にある緊張感とは逆の解放感、安堵感であるといえる。そこで第3因子は「心身の緊張感」と命名した。

4.4. 調査2の因子分析(分析④とする)

24項目の質問項目を用いて因子分析(重み付けのない最小二乗法、スクリープロットならびに因子の解釈

の可能性も考慮しながら因子数を決定、プロマックス回転)を行った。0.16を基準に共通性の値が低かった5項目(質問項目2, 3, 5, 6, 24)と0.35を基準に因子負荷量の低かった2項目(質問項目17, 18)を除いた17項目について再度因子分析を行った結果、4因子が抽出された。因子パターンをTable 9に、因子間相関をTable10に示す。

Table 9 分析④の因子パターン

	1	2	3	4
16. 上下関係	0.715	-0.202	0.029	-0.033
20. 敬老感	0.651	0.102	-0.123	-0.089
19. 長生き	0.518	-0.048	-0.099	0.140
11. 高学歴	0.503	-0.018	-0.038	0.249
15. 一軒家	0.480	0.115	0.067	-0.094
12. ○○道	0.046	0.706	0.083	-0.022
13. 時代物	-0.182	0.658	-0.160	-0.129
23. 同僚選び	0.060	0.418	0.074	-0.008
10. マンガ	-0.029	0.395	-0.090	0.244
4. 食への関心	0.018	0.386	-0.063	0.276
21. 宗教心	-0.008	0.159	0.621	0.284
14. 相撲	0.108	0.135	-0.606	-0.033
1. 和食の割合	0.202	0.141	-0.448	0.024
7. 虫の声	0.051	0.029	0.422	-0.177
22. 課長	0.267	0.249	0.395	-0.169
8. お守り	-0.022	0.038	-0.023	0.730
9. 占い	0.046	0.026	0.012	0.648

Table 10 分析④の因子間相関

	1	2	3	4
1	1.000			
2	-0.043	1.000		
3	0.081	-0.060	1.000	
4	0.178	-0.034	0.098	1.000

Table 9において、因子負荷量の高い項目の内容を参考に各因子を解釈し、以下のように命名した。

<因子1：社会的地位の顕示>

第1因子に対して高い負荷量を示した項目は5項目であり、これらに共通するのは、社会における地位の顕示傾向であると考えられる。まず、項目16(職場の上下関係に気を遣うか)、項目20(老人を人生の先輩として敬うべきか)、項目19(できるだけ長生きをしたいか)の3項目より、職場で上位にいる人(一般的に年長者が多いであろう)、年齢の高い人が力を持っており、そのような人たちに心を配り、敬意を払うことで、自分の地位の安定が保てる、また自分が年齢を重ねることで、社会的に力を持つ立場になり得る、と

いった文化背景の傾向であると推測できる。また、項目11(自分の子どもに対して、できるだけ「高学歴」と言われるような学歴を与えたいか)、項目15(将来、自分の持ち家として一軒家を持ちたいか)については、それぞれ高学歴であること、一軒家を持つことが社会的に優位、あるいは高い立場を示すものであると考える傾向の現れだと捉えることができる。

以上のことから、第1因子を「社会的地位の顕示」と命名した。

<因子2：日本への興味>

項目12(○○道への興味)、項目13(時代物が好きか)、項目10(「マンガ」を読むか)、の3項目については、○○道、時代物、マンガを広く「日本の芸術」と捉えるならば、それらに対する興味の傾向であると考えられる。また項目23(同僚選び)は、日本の会社、あるいは組織の中での人間関係に関連するものであり、項目4(食に関するテレビ番組や雑誌に興味があるか)は、在日の留学生であることを考慮すると、日本の食文化への興味の傾向であることが推測される。

これら5項目の共通性として、第2因子を「日本への興味」と命名した。

<因子3：自文化志向>

第3因子にプラスの負荷量を示した項目21(宗教心の有無)は「自分の信じるもの」への志向傾向、つまり自国の文化で育てられた判断基準であると考えられる。これに対して逆の負荷がかかる項目として、古くは日本の神事とも関わったという「相撲」(項目14)、日本人の食への志向を表す「和食」(項目1)があることから、「相撲」、「和食」が、回答者の内面にあって物事の判断基準となる心的志向とは異質なものとして捉えられたと推測される。これらをまとめて、第3因子を「自文化志向」と命名した。ここで興味深い現象は、上記の第2因子(「日本への興味」)の中に、日本の食文化への興味(質問項目4)が含まれていたにも拘わらず、この第3因子の中では、「和食」が異質なものとして捉えられていることである。実際に、項目1(普段の食生活の中での和食の割合)についてのt検定では、母語話者の得点が有意に高く、学習者の得点の平均は2.20という結果になっていた(Table 6を参照のこと)。

残りの2項目、項目7の「虫の声」と項目22(課長の選択)が正の負荷量を示していることについては、虫の声と季節感、という調和の志向、そして面倒見のいい課長を選択する傾向が、学習者にとって受け入れられる志向であると解釈できる。

<因子4：心の抛り所志向>

第4因子は、項目8(お守りや縁起物の所持)、項

目9（古いへの興味）の2項目のみとなった。2項目からの解釈は難しいが、分析①の第2因子と同じく、お守りや占いに頼るのは、自分の心の在り方や方向性を求める心の動きに関わっていると考えられる。よって、「心の拠り所志向」と命名した。

5. 総合考察

分析①は、日本語母語話者（調査1）の結果と日本語学習者（調査2）の結果を合わせて分析したものであり、両者に通じる「日本文化」に対する因子パターンが示された。調査1に比べて、調査2の被調査者が少ないので、明確な結論は出せないが、母語話者と学習者の「日本文化」に対する認識には、ある程度の共通点があることが示唆される。また、分析②から④では、両者の相違点を明らかにするために、母語話者、学習者に分けて分析を行った。

以下では、これらの分析結果に基づき、その共通点、相違点について考察する。

5.1. 母語話者と学習者の共通点

分析①から、因子1：物事の調和志向、因子2：心の拠り所志向、因子3：年功優位、の3つの潜在因子が抽出された。このうち、第3因子については、因子得点を用いて t 検定を行った結果、母語話者と学習者の間に有意差はなく、両者共に、年齢を重ねれば、その分社会の中（広く文化の中）で優位であるという認識がうかがえる。

因子1, 2についても、母語話者、学習者が共に持っている因子と言えるが、因子得点においては、母語話者より学習者の方が有意に因子得点が高かった（Table 5を参照のこと）。第1因子の命名に、「日本文化」を象徴するキーワードとして一般的によく用いられてきた、「調和」という用語が与えられたものの、本調査の被調査者である若い世代の母語話者（95.4%が年齢19～29歳）の場合は、自文化への認識として調和志向がありながら、その調和因子に影響される程度はそれほど高くないと言えよう。

第2因子については、 t 検定の結果が示す通り、質問項目3つのうち、項目21（宗教心）は、学習者の得点が有意に高く、母語話者では得点の平均が1.72という床効果の出た項目でもある。若い世代の母語話者で、宗教心を持っている、と意識している人は少ないと言えるだろう。また、項目8（古い）は母語話者の方が高得点であるという有意傾向がみられ、項目9（お守り）では、学習者の方が高得点であるという有意傾向がみられた（Table 6を参照のこと）。これらのこと

から、母語話者と学習者では、生活の中（広く文化の中）に心の拠り所を求める意識があることは共通しているが、そのよすがになるものは異なっていると推測できる。

5.2. 母語話者と学習者の相違点

分析③、④より、母語話者と学習者とは、「日本文化」に対して異なった因子パターンが確認され、日本文化に対する認識に相違点があることが明らかとなった。5.1.の共通点も踏まえ、両者それぞれの特徴について考察を加える。

5.2.1. 母語話者の因子構造

分析③より、母語話者のみの因子分析では3つの因子が抽出された。第1因子は、分析①の第1因子と同様、「物事の調和志向」という命名がなされた。しかし、この因子を構成する4つの質問項目のうち、 t 検定により、学習者との間で有意差があったのは項目17（環境保護）のみであり、しかも学習者の方が有意に得点が高かった。分析①の第1因子に見られた傾向と同様で、ここでも調和因子の存在はあるものの、この因子に影響される程度は高くはないことがうかがえる。

第2因子は、「拠り所志向」と命名されたが、この第2因子に、分析①で第2因子（「心の拠り所志向」）にくくられた項目8（お守り）と項目9（古い）が、項目21（宗教心）なしに含まれたことは特筆すべき結果である。これは、宗教心の背景無しにお守りや縁起物、古い存在があることを示唆しており、特に項目9（古い）では、 t 検定において、学習者よりも得点が高い傾向が出ていることから、自分の指針を得るために頼るものとして、古い、運勢などに興味を持つ母語話者の傾向が見て取れる。また、学習者においては項目8, 9のみが「心の拠り所志向」という1つの因子として成立しているのに対し（Table 9を参照のこと）、母語話者では項目22, 4が含まれたことから、生活する上で何か拠り所にするものを求める傾向が現れたと言える。

第3因子は「心身の緊張感」と命名され、正負の負荷量を示す4項目でままとまっている。ここで、この4項目に対する母語話者の得点の平均を見ると、プラスの負荷量がかかっている項目12（〇〇道）と項目6（着物）の得点の平均がそれぞれ2.32, 2.56であるのに対し、マイナスの負荷量がかかっている項目19（長生き）と項目23（同僚選び）は得点の平均が2.61, 2.86となっており、心身の緊張感が少ない方向への回答傾向が高いことがわかる。これらのことから、第1因子と同じように、母語話者の「日本文化」に対する認識には「心身の緊張感」という因子の存在はあるものの、

緊張の程度は弱く、物事に束縛されることを好まず、気楽さを求める意識があると解釈できる。

以上の3因子に加え、項目10の「マンガ」の存在を挙げなければならない。本研究の因子分析では項目10と共に関わる質問項目が見い出せず、項目10に影響を与える潜在因子は抽出できなかった。しかし、項目10の因子負荷量は0.716と高く、*t*検定では、学習者の得点よりも母語話者の得点の方が有意に高かった。母語話者にとっての、自文化の認識におけるマンガの存在、影響力は大きいことが推測される。

5.2.2. 学習者の因子構造

学習者からは4つの因子が抽出された。本調査では、母語話者に比べて学習者の被調査者数が少なかったが、それでも母語話者とはかなり異なった因子構造が確認された。

まず第1因子（「社会的地位の顕示」）であるが、この因子を構成している5つの質問項目のうち、項目19（長生き）以外の4つは、母語話者のみの分析では、因子を構成する質問項目として残らなかったものである。特に項目20（敬老感）と項目11（高学歴）は、*t*検定で学習者が有意に高かった項目でもあり（Table 6を参照のこと）、学習者は社会的に高い地位、立場を重視する意識が強いと言えるだろう。

第2因子は「日本への興味」と命名された。項目12（〇〇道）と項目13（時代物）は、分析①においては第1因子（「物事の調和志向」）を構成する質問項目であった。「物事の調和志向」は、母語話者、学習者が共に持っているものであるが、目に見える文化としての「〇〇道」、読み物や演劇などでの「時代物」は、学習者の文化には存在しないことから、学習者のみの分析では「日本への興味」として出て来たものと考えられる。また、項目23（同僚選び）と項目4（食への関心）は、共に母語話者の因子を構成する項目にもなっているが、分析④の因子命名で述べたように、学習者は母語話者とは異なる視点で、これらを日本文化に特有のものだと考えている可能性がある。さらに、この第2因子に項目10（マンガ）が入っていることも見逃せない。項目10は分析①、③においては、1項目1因子になったことから分析から削除された項目である。しかし5.2.1.で述べたように、母語話者にとって自文化の中で大きな存在であると考えられる「マンガ」が、学習者にとっては、異文化への興味の側面として現れたと推測できる。以上のことから、第2因子は、日本文化に対して、学習者が自文化とは異なっている、と認識するときに働く因子であり、日本文化特有なものへの興味の傾向として現れたのものであると考えられる。

第2因子に対して第3因子は、日本文化を認識する

ときに働く因子の中で、自文化を認識する際にも働く重要な因子であると考えられる。自文化とは異なる日本文化を認識するときに、異文化への興味の傾向として現れた第3因子と異なり、異文化に対して学習者の内面にある自文化志向が強く働いている因子であると考えられる。

最後に第4因子であるが、分析①の第2因子と同じ命名となった。分析①では項目21も入っていたが、ここでは項目8（お守り）、項目9（古い）の2項目のみからの因子になっている。しかし、背後に「宗教心」があると考えられる点が母語話者と異なっている。

6. 今後の課題

①質問項目の検討：今回の質問紙調査で使用した質問項目は、項目によって、着物、〇〇道、相撲、などの、いわゆる「日本文化」独自の文化要素（＝個別化された文化側面）への認識を問うものと、宗教や人間関係に関するような、日本文化に限らず、普遍的に存在している文化要素（＝抽象化された文化側面）を問うものが混在していた。今回の調査結果を基に、どの「日本文化」側面に、どのように焦点を当てるのか、を明確にし、それを的確に問える質問項目をさらに精選、吟味して作成する必要がある。

②対象となる学習者について：今回の被調査者は国籍が統制されていなかった。結果的に約6割が中国国籍の学習者であり、分析結果には、中国国籍の学習者の認識を反映する因子が抽出されている可能性がある。本研究の結果をより一般化できるように、今後は調査対象者を中国国籍の学習者に絞りたい。また滞日年数によっても「日本文化」への認識は異なることが予想されるので、滞日歴を説明変数に入れた調査を行う必要があるだろう。

【引用文献】

- エイ・アイ・ケイ教育情報部 2005 日本語学校全調査 エイ・アイ・ケイ出版部
NHK放送文化研究所 2000 現代日本人の意識構造 第5版 日本放送出版協会
細川英雄 2002 日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論と実践－ 明石書店
今田滋子・中村妙子 1975 初級日本語教科書の文化語 日本語教育, 27, 39-52.
統計数理研究所国民調査委員会 1992 第5日本人の国民性戦後昭和期総集 出光書店